

最近のトピックス

含歯型の歯原性角化嚢胞をめぐって

新潟大学歯学部口腔外科学第1教室

横 林 敏 夫

歯原性角化嚢胞 (odontogenic keratocyst) は、埋伏歯を随伴することが多く、その頻度は文献的には27%から40%で、自験例29例の観察においても、12例、41.4%とかなり高率である。これらの多くはX線的に含歯性嚢胞の像を呈し、組織学的にもいわゆる含歯性嚢胞と同様の所見を示す例があり、両者の関連については現在でも種々論議がかわされている。

本嚢胞と埋伏歯との関連について、Browne¹⁾、Brannon²⁾らが病理組織学的検索を行ない、次のように述べている。まず、Browne¹⁾によれば、24例中16例は歯冠は嚢胞腔より結合織により隔てられていたが、8例については末萌出歯の歯冠は嚢胞腔内にあり、上皮は、amelocemental junction に付着した真の含歯性嚢胞と同様であったとし、組織由来は extrafollicular origin で、嚢胞の増大に伴ない reduced enamel epithelium と癒合したものであると述べている。一方、Brannon²⁾は、含歯性嚢胞との関連が疑われた4例中2例は、歯牙は嚢胞腔と直接的交通はなかったが、残りの2例は、角化上皮が埋伏歯の cementoamel junction に付着し、真の含歯性嚢胞と同様であったとし、いわゆる含歯性嚢胞で角化嚢胞の像を呈するもの (dentigerous keratocyst) も存在する可能性があるとして述べている。自験例12例の肉眼的観察では、記載不明の4例を除く8例は明らかに嚢胞壁外にあり、明らかな真の含歯性嚢胞の所見を示すものはなかった。

最近、Altini³⁾は、摘出物所見において、嚢胞壁は明らかに埋伏歯々冠を囲み、いわゆる含歯性嚢胞と同様に歯頸部に付着している、歯原性角化嚢胞17例を見出し、これを follicular primordial cyst-odontogenic keratocyst と呼んでいる。歯牙と嚢胞壁を一塊として摘出できた症例の病理組織学的所見は、歯頸部に最も近

い裏層上皮は reduced enamel epithelium で、一部分の非角化性重層扁平上皮を経て、大部分は典型的な角化上皮で裏層されていたとしている。このような嚢胞の組織由来は、Browne¹⁾と同様に extrafollicular origin とし、歯牙が口腔内に萌出すると同様な方法で、埋伏歯が先在する嚢胞腔内に突出することにより起こるものであろうと推論し、いわゆる intrafollicular origin である含歯性嚢胞が角化したものとは違っていると述べている。Brannon²⁾の例は、角化上皮が cementoamel junction に付着しており、follicular primordial cyst ではなく、keratinizing dentigerous cyst であらうとしている。

いずれにせよ、同じ埋伏歯の中に含む歯原性角化嚢胞の像でありながら、分類、組織由来および名称について種々の見解があり、診断上大きな混乱をまねく結果となっている。このような嚢胞をどのように考えるかは、今後の検討課題であるが、ただ、埋伏歯の中に含み、退縮エナメル上皮から発生する歯原性石灰化上皮腫や歯胚上皮から発生する腺様歯原性腫瘍の例を考えると、埋伏歯を含む嚢胞をすべてただ一つの含歯性嚢胞としなくてはならない理由はないのではないだろうか。

参 考 文 献

- 1) Browne, R. M.: The odontogenic keratocyst. Histological features and their correlation with clinical behavior. Br. Dent. J. **131**: 249, 1971.
- 2) Brannon, R. B.: The odontogenic keratocyst A clinicopathologic study of 312 cases. Part I. Clinical features. Oral Surg. **42**: 54, 1976.
- 3) Altini, M. et al.: The follicular primordial cyst-odontogenic keratocyst. Int. J. Oral Surg. **11**: 175, 1982.